

ガイドマップ 4

中部Ⅱ（北方～中山～鬼高）



～地域のあらまし～

市川市の市街地東部に位置するこの地域は、法華経寺を中心に古くから栄えた地域です。船橋市から続く台地とそれに連なる市川砂州、台地の南側に複雑に入り組んだ低地など、複雑な地形をしています。点在する遺跡や寺社林など古くから人々の生活と深く関わりを持ってきた自然が息づいています。

市川市

市川自然観察ガイドマップについて

市川市では、市民の皆さんに身近な自然環境に目を向けていただき、そこに生息する動植物の姿や自然のしくみについて知っていただくため、市川市を6つの地域に分け、地域ごとに順次自然観察ガイドマップを発行しています。市川市の自然環境は決して豊かとは言えませんが海、低地の市街地、川、谷津、斜面林、台地上の農地など、バラエティーに富んでいるのが特徴です。

自然観察ガイドマップは、地域の自然の見どころを紹介したマップとあわせて、市川市の自然を観察する上でのテーマを、各マップに10テーマずつ合計60テーマ紹介しています。どうぞ休日のお散歩のお供にさせていただき、身近な自然をお楽しみ下さい。

市川市では市川市の自然を紹介する下記の資料を発行しています。

- 市川の緑と水辺のガイドブック
- 市川市巨樹・巨木林調査報告書

また、歴史や文学に関する出版物も発行しておりますので、詳細についてはお問い合わせ下さい。

法華経寺のまち・中山

下総中山駅を降りてすぐ北側の千葉街道を渡ったところから、昔懐かしいムードに包まれる法華経寺の門前まちです。黒門からは老舗の和菓子屋・そば屋・仏具屋などの商店街が、赤門から先は塔頭（たちゅう）と呼ばれる法華経寺の脇寺が左右に建ち並んで、それぞれが由緒あるお寺です。

法華経寺は、日蓮上人に関連した遺品をたくさん保存しており、日蓮宗四大本山のひとつ。五重塔は何回か修復されましたが、江戸時代初期の様式を保つもので、千葉県では唯一のもので。広い境内の中央に位置する祖師堂は、屋根を前後に二つ並べたような比翼入母屋造り、この造りは全国で二つしかないものです。平成9年（1997）に解体修理が終わって建立当初の形に復元されました。

祖師堂の左側には竜玉池、法華堂など。右側から奥へ進めば、クスノキに囲まれた聖教殿（しょうぎょうでん）があります。周辺の寺院とともに、春はサクラ、秋は紅葉のみじ、黄色のイチョウと四季の変化も楽しみながら散歩道は、奥の院へと続きます。



きれいに掃き清められている法華経寺の参道

巨樹の暮らしを考える

食べ物やパートナーなどを探して動物が動き回るのに対して、植物は大地に根を下ろし、じっと長い時代の流れを見守っています。風を受けて飛んだり、動物に運ばれたりするのは、花粉とタネの時だけでしょう。

市川には、北部や行徳などの社寺を中心に200本ほどの巨樹が見られます。そんな大木に出会った時は、ゆったりとした気分になって、時の流れを感じとれるといいですね。

法華経寺の“泣きイチョウ”には、見上げる枝の中ほどにモチノキのような常緑樹が茂っています。野鳥が運んだ一粒のタネが幸運にも芽生えて、僅かなくほみに根を下ろしたようです。一年の半分はイチョウの葉が茂っているので人目にもつかない、日当たりも悪い。この木はどこまで成長を続けられるのでしょうか。

根元のあたりには、シュロの芽生えも見られます。これも野鳥が運んだものか。こうした場所は、踏まれたり掃除されたりする。このうちのいくつが育つのでしょうか。このイチョウは樹齢何年ぐらい？ 100年前は明治の中ごろでした。300年前は徳川時代でした。



泣きイチョウについた常緑樹と根元の芽生え

鬼子母神とザクロ模様

500人もの子どもを持ちながら、人の子をさらって……という鬼子母神。お釈迦さまがそれを止めさせるためにザクロを与えた話、ご存知ですね。

鬼子母神はあどけない乳児を抱いた像などがよく知られています。日蓮宗では法華経にもとづき鬼子母神への信仰が厚く、本院の奥には鬼子母神堂があります。法華経寺では節分の豆まきも“福は内”だけ、“鬼”の字もしばしば鬼の角を取った文字で書かれたりしています。

ザクロは、多産、不死、希望などのシンボルで、イランなどに自生するザクロ科の植物。ブドウとともに古くから知られた植物で、ソロモンヤツタンカーメンなどの時代にもザクロ模様が登場します。砂漠の中近東では、渴きを癒す貴重な果物だったとともに、薬用や染料にも使われていました。

中国には漢の武帝の時代にベルシャから伝えられ、日本へは、平安時代にもたらされたとされています。

法華経寺の周辺のお寺にも鬼子母神を奉っているところがあります。ザクロや鬼子母神がどこにいらっしゃるのか、探してみましょう。



竜淵橋の欄干についているザクロ模様

川に沿って上るユリカモメ

江戸川河口などに集まっていたユリカモメが、大柏川沿いに上流へ上ってくるのは、毎年10月末ごろでしょうか。他のカモメ類との区別は、すこし小型、嘴と脚が赤っぽいことです。ただたんだ翼の先は黒いのに、上空を旋回する時に見せる初列風切羽の先が白く輝くのがきれいです。

最近では国際的な協力体制で、鳥に標識をつけての行動調査も盛んに行われています。それによるとカムチャッカの河口の三角州などで繁殖した幼鳥が、暖かい日本列島の各地に来て越冬する。4月から5月初めにはまた戻るというパターンを繰り返すことが分かっています。

雑食性で、小魚、昆虫、雑草のタネ、残飯と何でも食べます。まだ漁船に魚群探知機がついていなかった時代には、遠くからこの鳥の大集団の下には魚の群れがいると、見当をつけたそうです。今でも三番瀬のまき網漁場には、水揚げ作業になると大群が集まってきます。

かつて、東京の夢の島がゴミ処分場だった頃の、ユリカモメの大集団を記憶している人もいらっしゃるのでしょうか。今は、心ない人の過剰な餌やりが問題になっています。



大柏川に沿って上流へ飛ぶユリカモメの群れ

美濃輪台遺跡と鬼高遺跡

谷津が入り組んだ市川北部には、50あまりの遺跡や貝塚があって、そのいくつかは見学できる形で公開されています。

東部公民館のすぐ南に位置する美濃輪台遺跡は、竪穴式の住居跡こそ見つかりませんが、火を使って調理したと思われる炉穴が発見されています。AB2地点の発掘場所のうち、A地点の貝殻を放射線同位元素のC14で測定したところ、7200年ぐらい前のものという数字が出たそうです。台地がカーブして農具の箕に似たところから、台地の上を美濃輪台と呼び、B地点が今は小さい公園になっています。

一方の鬼高遺跡は、メディアパークや現代産業科学館のすぐ南側です。工場の建設工事の時に水田の下から貝殻や土器片、獣骨などが出土しました。海に近い低地にあることが特徴で、市の史跡に指定されています。

貝塚にはマガキ、ハマグリが1メートル以上も堆積していました。ここで発掘された土器は5～6世紀ごろのもので、鬼高式土器と呼ばれ市立市川考古博物館に展示されています。



美濃輪公園付近の晩秋の斜面林

聖教殿近くのクスノキ

丸い感じでふわふわとした葉の茂り方、幹の細かい縦じま模様がクスノキの特徴です。自生地が日本にあるのかどうかは意見が分かれるようですが、日本書紀にも記載され、弥生時代には丸木舟がこの木で作られていました。関東以南に多く、天然記念物級の巨樹もたくさんあります。

材は適度に堅く彫りやすく、虫害も少ない。インドなどの南方系の仏像に香木としてのビヤクタンを使ったように、国産の香木としてクスノキの材が尊重されてお寺に多く植えられたという説もあります。

市川でのクスノキの巨木は、国府台の真間山付近と法華経寺の聖教殿の周囲で多く見られます。生長が早いので、幹の太さの割には樹齡は若いようです。常緑樹ですが、春の新芽が開くと1年前の葉はすぐに落ちてしまう。5月頃のクスノキの根元は、落ち葉でいっぱいになります。幹に近寄って見上げると、葉が付いているのは若い緑色の枝の部分だけです。

葉柄を持って下へ引くと、木を傷めなくて葉が取れます。ちょっともんで嗅ぐと、樟脳の匂いがします。



聖教殿近くのクスノキの巨樹の根張り

桃が咲き、馬がいた頃の市川

明治の日露戦争の時は、大野付近の馬が徴用されて戦地へ運ばれたこともあり、宮久保などにも従軍した馬の碑が残っています。大洲の防災公園になっているところも、短い期間で市川競馬場があったそうです。

第二次世界大戦までの市川は、大消費地の東京のすぐ隣ということで、ナシばかりでなく、モモやイチゴの生産も盛んでした。さらに野菜栽培やみじの名所でもあったのです。今は大町あたりの畜産農家もゼロになりましたが、昭和30年（1955）近くまで市内を馬車通っていたといわれます。

法華経寺の黒門を右に曲がった踏切り近くに、小さな馬頭観音堂があるのをご存知ですか。馬頭観音の石碑には明治21年12月建之と刻まれています。昭和30年頃まではまだ農地も広がっていて、荷役用の馬の埋葬場所もあったとのこと。

当時の馬の餌は、稲わらと麩（フスマ）、それに輸入大豆粕などでした。わらを探るためには、馬一頭あたり4～5反の田んぼが必要だったようです。ふだんは目立たないこのお堂を、地元の人は葬馬堂と呼んでいます。



馬頭観音堂脇の石碑と堂内の馬の掛軸

よく見て気づく、それからの展開

図案や掛け軸などに描かれた動植物を見て、オヤツと思うことがあります。科学的な正確さを必要としないものではありますが……。

植物の場合、サクラなどの印象が強いのでしょうか、ユリらしい花が5枚の花びらで描かれている例が、なぜかヨーロッパのデザインにもよく見られるのです。

サクラのような双子葉植物は花びらなどの基本数が4か5なのに対し、ユリのような単子葉植物では3です。ユリなどでは、花びらもがくに相当する部分も同じような形で、3枚ずつあるため、6枚の花びらのように見えます。

おしべの数からの分類では、6本なのがユリ科やヒガンバナ科、3本なのがアヤメ科です。

受粉しためしべの子房は、熟して果実となります。その中のタネは、サクラやウメは1つ、カキは4つ、リンゴやナシでは5つと種類ごとに決まっています。

写真の座ぶとんに描かれた花は、花の大きさのわりに茎が細く風で折れそう。葉の枚数も少ない。花びらが5枚で、その外側ががくがある。どんな仲間の花だと思いますか？



この座ぶとんの植物は何の仲間でしょうか

中山文化村 清華園と旧片桐邸

参道商店街を法華経寺に向かって進むとすぐ右側、市役所市民課分室に並んでいるのが清華園です。

中山の旧家・石井家から市へ寄贈された和風の民家と庭園。周囲の建物に囲まれた400坪ほどの細い庭ですが、四季折々の花が楽しめる散歩道です。

さらに、法華経寺の東側を抜けて、二又になるところに案内板があり、左へ行くと奥の院、右へ曲がると旧片桐邸となります。長年電器商を営まれていた片桐家から寄贈されたもので、週末の金曜日から日曜日は開放されており、静かな和風庭園に心も和みます。

定期的なコンサートなどもあって、楽しみにしているご常連も多いとか。二階に上がると、台地と低地が入り組んでいるこのあたりの地形が一望できます。

清華園と二つあわせて“中山文化村”、市川案内人の会がガイドのお手伝いなどを行っています。古い歴史が息づく中山のまちに、市民の新しい息吹が感じられるホットスポットです。



手入れの行き届いた旧片桐邸の日本庭園

市川のタンポポは何種類？

“がくが垂れ下がっているのが西洋、上を向いているのが日本”などという説明を聞くこともあるが、ニホンタンポポという種類はありません。

それに、キク科の仲間には小さな花が集まっている頭状花序なので、その下の緑色の部分はがくではなくて、総苞と呼ばれます。

市川市の自然環境実態調査で報告されているタンポポは、セイヨウタンポポ、アカミタンポポ、シロバナタンポポ、カントウタンポポ、エゾタンポポです。葉の形では区別が難しいので、花の下の総苞の形で、セイヨウとアカミの区別はタネの色で確かめてください。

最近では、セイヨウとカントウの中間型も増えて、分類も面倒になってきました。セイヨウのように総苞が少し反り返って、カントウの特徴である角条突起があるものをアイノコタンポポと呼ぶこともあるようです。

カントウタンポポが少なくなっているのは、セイヨウに比べて繁殖力が弱いためもありますが、昔からの自然環境が開発などで破壊されてしまったり、裸地化されて、その隙間に移入種としてのセイヨウタンポポが入り込んだといえるでしょう。



総苞片が反り返らないカントウタンポポ

いちかわ 自然観察 ガイドマップ 4

中部Ⅱ 北方～中山～鬼高



③④ 市川の緑は、台地と低地とをつなげる斜面林として残されていることが多い。子之神社もその一例。林床はアオキやヤツデやシュロなどが茂っている。



ズ。コカマキリの威嚇のポーズ。小型でこげ茶色。



ナガコガネグモ。網に白い飾り糸をつける。垂直円。



庭先の花についていたヒメシロモンドクガの幼虫。



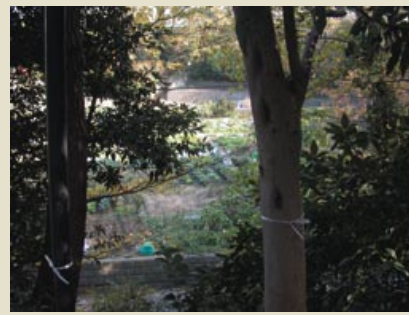
洗剤の泡が気かりだが、脚が短く潜水も出来ないユリカモメは、排水口近くでしぎりに餌を探す。



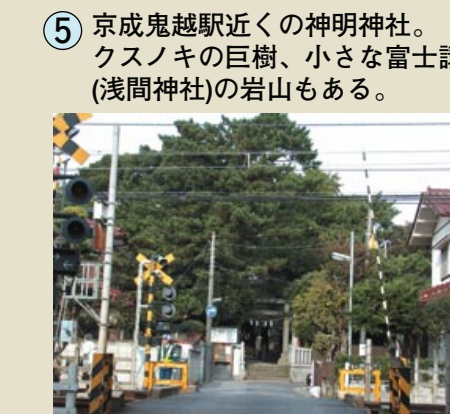
駐車場の草むらで交尾するクロアゲハ。この近くに、ミカン科の植物があるのか？



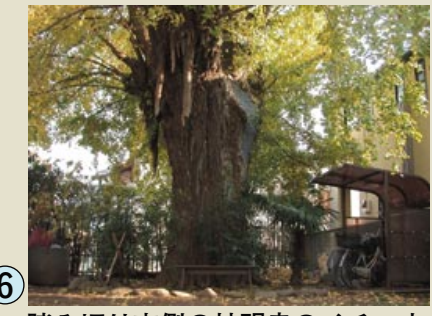
高速道路脇に生えるヒメジョオン。柔らかな茎にはアブラムシの生活もある。



①② 北方3丁目にある美濃輪台遺跡は、市川市内で数少ない縄文時代早期後葉のもの。貝塚の年代測定から7200年前頃といわれる。今は一部のみ残され、台地上は公園に、その下は市民農園になっている。写真②は湧水地点と解説の石碑。



⑤ 京成鬼越駅近くの神明神社。クスノキの巨樹、小さな富士講(浅間神社)の岩山もある。



⑥ 踏み切り南側の神明寺のイチョウは、小栗判官駒つなぎの銀杏といわれる。



⑦ 市川砂洲の東端にあたる場所の高石神社。風雪に耐えて伸びる太い枝の重みを感じてほしい。



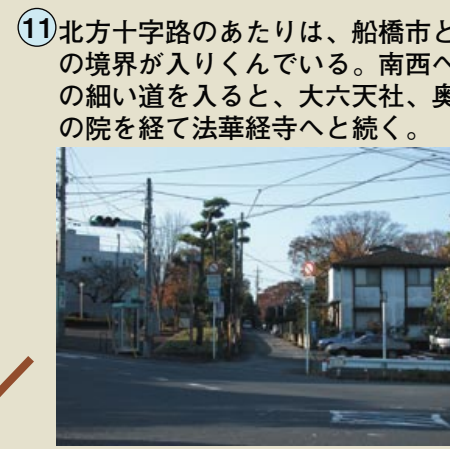
⑧ こんもりとしたスタジイの林に包まれたことん神社。かつてここに日本毛織の工場があった。東側には四季の花壇。



⑨ 小さな公園になっている鬼高遺跡



祖師堂側から南に向かって、赤い橋の電測門左右のケヤキの巨木を見る。



⑪ 北方十字路のあたりは、船橋市との境界が入りこんでいる。南西への細い道を入ると、大六天社、奥の院を経て法華経寺へと続く。



⑫⑬ 祖師堂の奥にある聖教殿(しょうぎょうでん)のまわりは、国府台の弘法寺周辺とともに、クスノキの見事な巨木が立ち並ぶ。



⑭ 冬の祖師堂。国指定の重要文化財。



⑮ 西側の高台から見下ろした桜の季節の五重塔



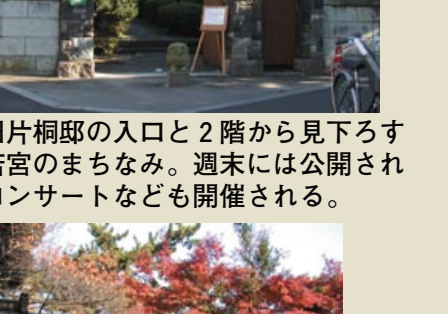
⑯ 大六天社は典型的な鎮守の森。市川で最大のタブノキをはじめ、スタジイ・ヤブツバキなどの巨木が茂る。



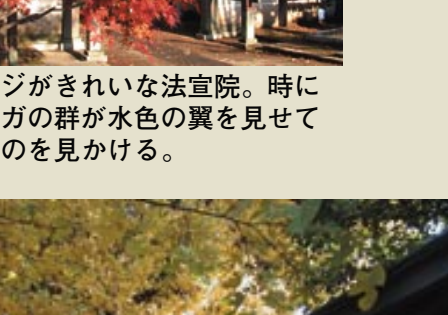
⑰ 五重塔わきの道を5分ほど歩くと道標があり朱塗りの奥の院がある。巨木も多い。



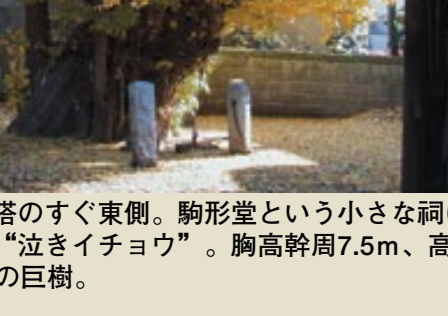
⑱ 旧片桐邸の入口と2階から見下ろす若宮のまちなみ。週末には公開されコンサートなども開催される。



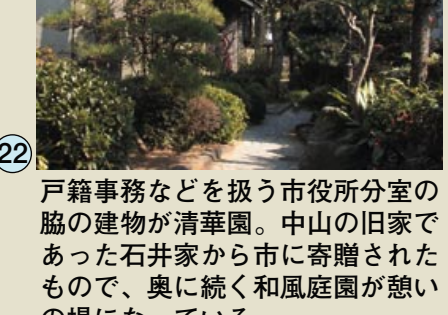
⑳ モミジがきれいな法宣院。時にオナガの群が水色の翼を見せて飛ぶのを見かける。



㉑ 五重塔のすぐ東側。駒形堂という小さな祠にある“泣きイチョウ”。胸高幹周7.5m、高さ20mの巨樹。



㉒ 戸籍事務などを扱う市役所分室の脇の建物が清華園。中山の旧家であった石井家から市に寄贈されたもので、奥に続く和風庭園が憩いの場になっている。



㉓ 京成中山駅に近い総門はその色合いから黒門とも呼ばれる。



中山法華経寺泣きイチョウ周辺の植生断面図



⑳ 法華経寺とともに百日荒行道場として全国に知られる遠寿院。



法華経寺周辺の巨樹の分布 “巨樹に会いにいこう” (市川市2002)から



㉔ いつもは見過ごしてしまう馬頭観音堂。葬馬堂とも呼ばれ、昭和30年頃までは、このあたりは馬の埋葬場所だったといわれる。

★植生断面図2点は、市川学園教諭の故石井信義氏が1970年頃にかかれたもの。環境の変化に伴う現況との比較を現地でご確認ください。
★道路は主なものを示してある。縮尺は 1:12000 およその目安は8cmが1km。

★マップデザイン：八木 集